

令和7年度 学校評価書【新庄北高等学校最上校】

自己評価の基準 A:十分達成できた B:ほぼ達成できた C:あまり達成できなかった D:達成できなかった			学校関係者評価の評価基準 A:とても良く評価できる B:概ね評価できる C:やや評価できない D:まったく評価できない			
番号	評価項目	今年度の成果と課題	自己評価	次年度への改善点	学校関係者評価	学校関係者の意見・要望
1	教育方針 学校経営	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 本校の学びの「スローガン」ともに学び、ともに伸びよう～つながる ひろがる 高めあう～」および経営方針の具現化に向け、教職員が組織的・協働的に教育活動を展開し、一定の成果を得た。特に各教科において教材の精選や指導法の工夫に努め、個に応じた丁寧な授業を実践したことで、基礎学力の定着には着実な進展が見られた。今後は、基礎の定着を前提としつつ、上位層の能力をさらに伸ばさせるための発展的な指導体制の構築が課題である。</li> <li>◆ 一人ひとりに寄り添ったきめ細やかな指導を、組織として継続的に実践することができた。生徒の特性や支援ニーズの多様化・複雑化に対応するため、次年度も個に応じた指導・支援の質をさらに高めるべく、校内研修の充実を図る。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 各教科の授業と、朝学習やリラーニングを有機的に関連付け、教科横断的な視点を取り入れることで、学習効果の最大化を図る。また、分掌・学年・教科間の連携を強化し、上位層の学力伸長を含めた指導体制の更なる充実を目指す。あわせて、学校行事やボランティア活動における主体的な活動を支援し、生徒の自己有用感および自己肯定感の醸成に努める。</li> <li>◆ 生徒一人ひとりの特性に応じた指導・支援の充実を図るため、校内研修による資質向上に努めるとともに、校外研修への積極的な参加を促し、支援方法の多様化・専門化を目指す。あわせて、関係諸機関との連携を一層密にし、組織的な支援体制を強化する。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 学校だよりを毎回楽しみに拝読している。個に応じたきめ細やかな支援や指導は最上校だからこそできる強みととらえている。志誠館高校となっても継承を強く望む。</li> <li>◆ 生徒一人ひとりの個性や学力に配慮した学習指導はありがたいし、大変良いと思う。学力の高い生徒には、さらなる指導強化の様子があうかがえ、今後の学校発展になくてはならない方針と思われ期待したい。</li> <li>◆ 一人ひとりの生徒に寄り添って指導しているのがよく分かる。</li> <li>◆ 各教科の平均点の推移等が分からないと、基礎学力の定着が分からないのではないかと。</li> <li>◆ 先生方の授業と指導のやり方は生徒一人ひとりの教育に合っている。</li> </ul>
2	学習指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 各教科でのシラバス活用やUDの視点を取り入れた授業実践、特別支援教育支援員との連携により、生徒の多様なニーズに応える手厚い指導を継続できた。また、生徒のタブレット活用や教員によるICT授業実践も促進されたが、教育効果をさらに高めるための活用場面の精査が必要である。</li> <li>◆ リラーニングや朝学習、家庭学習時間調査を計画通り実施し、基礎学力の定着と学習習慣の定着を図った。一定の成果は見られたものの、一部の生徒において適切な生活リズムや家庭学習の習慣化が十分とは言えず、個々の状況に応じた継続的な働きかけが今後の課題である。</li> <li>◆ 図書委員会による積極的な活動や、Google Classroomを活用した情報発信により、読書環境が充実した。特に地域の放課後児童クラブへの読み聞かせといった校外交流は、生徒の社会性を育む貴重な機会となった。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 生徒が一人一台端末を日常的に使いこなし、協働学習や個別最適な学びを深められるよう、ICT活用の場をさらに拡大する。教務研修会等を通じて教員の指導スキルを継続的にアップデートし、デジタルならではの表現活動や意見共有を促進する。あわせて、情報モラル教育を徹底し、適切かつ効果的な活用能力を育成する。</li> <li>◆ 生徒の生活リズムの安定と自律的な学習習慣の確立を目指し、家庭学習時間調査の分析結果をより具体的に指導へ反映させる。学習習慣が未確立な生徒に対し、単なる調査に留まらず、具体的な家庭学習の進め方や時間管理の指導を強化する。</li> <li>◆ 「総合的な探究の時間」の内容をさらに深化させ、生徒が主体的に課題を設定し、解決に向けた探究プロセスをより深く経験できるプログラムを構築する。地域資源の活用や外部機関との連携も視野に入れ、単なる調べ学習に留まらない、実社会との接点を意識した探究活動の展開を目指し、カリキュラムの再編と質の向上を図る。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ ICTの活用が進む中、小中学校では読書離れが課題となっている。生活習慣、学習習慣の確立と共に、これからの人生の糧となる読書習慣の定着を期待する。</li> <li>◆ タブレット・ICTの活用を進められ、現代の情報社会教育に力を注いでいることが見られ、実践的、実用性のある指導であると思った。学習が楽しいことだと気づかせ、習慣的な家庭学習を進めている様子があうかがえ、大変良いと思う。</li> <li>◆ 特別支援教育の内容をもっと具体的に示した方が理解しやすいのではないかと。</li> <li>◆ 学習指導は生徒の数が少ないから全員に行き届いている。</li> </ul>
3	進路指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 年間計画に基づく学年別の企画やキャリア・パスポートの活用により、生徒が将来を具体化する土壌を築けた。特に全職員の協力による3年生への面接・小論文等の個別指導は、粘り強く丁寧な関わりによって進学合格実績に直結した。</li> <li>◆ 年3回の進路希望調査や企業見学・オープンキャンパスへの参加促進により、早期の意識付けを図った。特に就職希望者には企業理解を深めさせ、入社後のミスマッチ抑制に注力した。また、卒業生の追跡調査や訪問を通じ、進路先での定着状況も確認できている。一方で、1年生に対するオープンキャンパス等の外部活動への促しは途上であり、早期の意識付けが今後の課題である。</li> <li>◆ 朝学習と確認テストを継続し、進学・就職試験に対応できる基礎学力の基盤形成に努めた。保護者に対しては、3年生対象の保護者会や進路だよりの発行により、適時適切な情報共有を行った。今後の課題として、基礎学力の更なる定着に向け、各教科やリラーニングの時間での復習・活用を横断的に強化していく必要がある。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 生徒が自己の能力や適性を客観的に理解し、納得感のある進路選択を行うため、学年との連携を一層強化する。キャリア・パスポート等の記録を蓄積・分析し、生徒自身が自己の成長や適性を内省できる機会を増やす。特に1年生の早期段階から、将来の生き方を主体的に描けるようなオープンキャンパスへの参加の促しや面談の充実を図る。</li> <li>◆ 保護者に対し、早い段階から個に応じた進路情報を提供し、家庭と学校の連携を深めていく。多様化する進路状況に柔軟に対応できるよう、保護者の理解を助ける情報発信を工夫する。また、企業、進学先や関係機関とのネットワークを維持し、生徒の希望と社会のニーズを合致させるための求人開拓や情報収集を継続して行う。</li> <li>◆ 朝学習等で培った基礎学力を、各教科の授業やリラーニング等の場面で復習・活用できるように、全学年で連動した指導体制の構築を引き続き検討する。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 今年度は就職、進学と幅広い進路選択が叶い、最上校の対応力、学校力の高さを感じた。生徒と家族に寄り添った適正な進路指導に学校関係者から高い評価があった。</li> <li>◆ 労働時間、男女差のない多様化する社会において、自分の適性を見極め選択することの大変さを指導するのは難しいと思う。</li> <li>◆ 生徒が自分の長所、得意分野を理解したうえで進路指導を受けられるように、先生方が手厚く指導していることが分かった。</li> <li>◆ 進路指導において2年生からより丁寧に計画していただき心強く思う。</li> </ul>
4	生徒指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 個人面談や保護者連携、日常的な声掛けにより基本的生活習慣の定着を図った。安全面では、自転車通学生へのヘルメット着用と保険加入を義務化し、また、交通安全講話を通じて交通安全意識を高めることができた。一方で、寮生の居室の整理整頓など、生活細部における指導の徹底には至らず、継続的な働きかけが課題である。</li> <li>◆ 各委員会が学校行事で主体的役割を果たし、昼休みの巡回や換気啓蒙など日常活動も定着した。他校との合同リーダー研修会では、外部刺激によるリーダー層の資質向上が見られた。今後は、これらの研修成果をいかに全校生徒の活動に波及させるかが鍵となる。</li> <li>◆ いじめアンケートやSNS・薬物乱用防止講話により、リスク管理と規範意識の醸成に努めた。ボランティア活動では、クリーン作戦や高齢者交流を計画通り実施し、地域との繋がりを維持した。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 学校生活に落ち着いて取り組めるよう、基本的生活習慣の確立を中心に据えて安心・安全な学校づくりを推進していく。また、寮生活における整理整頓を含めた生活習慣の定着に向け、寮訪問の質的向上と寮管理人とのさらなる連携強化を図る。</li> <li>◆ 生徒会役員だけでなく、各委員会のリーダーが自ら企画・運営する機会を増やすことで、フォロワーシップも含めた組織全体の活性化と、生徒主体の学校行事運営をさらに加速させる。</li> <li>◆ いじめ、問題行動、SNS利用によるトラブルの未然防止や早期発見のため、担任面談等をこまめに行って生徒の状況把握に努め、教職員間の情報共有を密にし、チームとして生徒指導にあたる。また、教育相談体制をさらに強化し、個人面談やアンケートの結果をより早期に具体的支援へ繋げることで、いじめや不登校の未然防止における実効性を高める。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 全国的なSNSに関わるトラブルや事件は途絶えることがない。誰もが加害者、被害者になる可能性も指摘されるところである。今後とも危機意識の向上につながる危機管理能力や規範意識の育成につながる指導の継続、強化をお願いする。</li> <li>◆ 親でもなかなか目の届かない部分で、難しい場面であると感じる。担任の先生を信頼し、なんでも相談できる関係、三者のコミュニケーションを構築してほしい。</li> <li>◆ いじめは早期に発見し、心の傷を少なくしてほしい。</li> </ul>
5	保健指導 安全管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 行事や長期休業ごとの健康調査により、生徒の状況に応じたきめ細かな保健指導を展開できた。また、受診勧奨や保健だよりを通じた家庭との連携により、未受診者への働きかけも強化された。今後は、治療済みの報告率をさらに高めるためのアプローチが課題である。</li> <li>◆ 多様な生徒に対して、SCやSSWの助言により適切な支援について検討することができた。また、SCと1学年生徒との全員面談による早期把握や、教職員対象の就労支援研修を実施したことで、支援体制の質が向上した。</li> <li>◆ 日常的な安全点検を徹底するとともに、クマ対策として柿の木の伐採を迅速に実施した。実情に合わせた危機管理マニュアルの適宜見直しや、計画通りの防災訓練実施により、生徒の安全確保に努めた。今後は訓練の形骸化を防ぐため、より実践的で多様な想定に基づく訓練の実施が求められる。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ これまでの指導実績を踏まえ、健康診断の状況により、生徒の発達段階に応じて学年ごとの保健指導内容を見直ししていく。</li> <li>◆ 町との連携を強化し、校内での献血協力活動を新たに実施する。保健委員会を中心に、献血の意義を学ぶ事前学習や周知活動を行うことで、生徒の社会貢献意識を養うとともに、学校と地域のつながりをより強固なものへと発展させる。</li> <li>◆ 従来からの防災訓練に加え、より多様な災害状況を想定した訓練を検討する。さらに、非常災害発生時を想定し、災害用伝言ダイヤルや災害用伝言板、SNS等を活用した「保護者・生徒間の安否確認訓練」を新たに取り入れることも検討する。ITリテラン向上と連動させ、実効性の高い危機管理体制を生徒・保護者・学校の三者で構築する。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 家族と離れて生活を送る生徒が多いことから、定期的な健康調査や個別の保健指導が重要である。引き続き精検受診100%の達成に期待する。</li> <li>◆ 健全で安全な指導と保健委員会のさらなる活躍を期待する。</li> <li>◆ 寮生が多い中で、町教育委員会との情報共有はさらなる強化が必要であり、とても大事なことである。</li> <li>◆ 安心して学校を頼ることができた。</li> </ul>
6	地域連携 その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 地域におけるボランティア活動への参加は、生徒の活躍の場を広げ、社会性の育成や地域貢献意識の向上に一定の成果が見られた。その一方で、自発的な活動への展開には至っておらず、主体性の喚起と参加体制の工夫が今後の課題である。</li> <li>◆ PTA評議員会の高い出席率に加え、運動会や文化祭、会報発行等において多大な協力を得ることができた。保護者との連携は極めて良好に推移したが、役員の負担軽減や持続可能な組織運営が課題である。特に、行事への協力形態や広報活動の在り方について、時代の変化に合わせた見直しが必要である。</li> <li>◆ 新庄北高本校との「キャンパス制」では、本校生徒のみならず統合に向けて新庄南高校の生徒会役員を迎えての交流活動や、宮城県佐沼高校の生徒会役員との交流活動を有意義に進めることができた。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 町や地域社会との連携について、これまでの取り組みを総括し、潜在的な課題を抽出する。単なる行事参加に留まらず、地域と学校が互いにメリットを享受できる関係性を保てるよう検討する。地域の教育資源を効果的に活用しつつ、学校が地域にどう貢献できるかという視点からも連携を深める。</li> <li>◆ PTA役員の負担軽減を目的として、PTA会報の発行方法を整理し、年1回のカラー印刷発行へと改める。また、文化祭等の行事協力の在り方を含め、PTA組織や活動形態について検討する。無理のない持続可能な活動形態へ移行することで、保護者の主体的な参画を促し、学校と保護者の協力関係をより強固なものにする。</li> <li>◆ キャンパス制における交流の際、一部の生徒だけでなく、全校生が交流できる企画を多く計画していく。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 「つくし会」をはじめ最上校の地域貢献活動は、町民より高い評価をいただいている。降雪量の多いこの冬季は除雪のニーズも高まっている。高齢者や一人暮らしの世帯が年々増えているので、高校生の尽力が町民の元気につながる。</li> <li>◆ 今後も地域に根差した活動をお願いする。</li> <li>◆ ボランティア活動をもっと頑張してほしい。</li> </ul>